



續拾遺和歌集上



石渠文庫

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. The script is dense and fills most of the page. The words are difficult to decipher due to the cursive style and fading of the ink.

Handwritten text, possibly a signature or a specific heading, located in the middle of the page.

Small handwritten mark or signature at the bottom of the page.

續拾遺和歌集卷第一

春歌上

去立こころとよみ侍り

前大納言為家

わが玉年二秋とてそよきふらむと立子也

子五百番方合。後帝極括政おた政大臣

そよきてし物いあはれあはれや大和りらん人まこと

久安六年宗法院。百三十分をきつ時ま

乃始の奇。皇太后后文太事俊成

春あはれとそよきとこころす。心あはれ物日のたけあはれ

野一ら子。後二位家澄

夫の原とすそとゆわく玉れ年とよまゆ。め成り

建保四年後鳥羽院。百三十分をきつ時

春後雅經

久安おまよとそよきとこころす。心あはれ物日のたけあはれ

初まのらと。正二位家成

と書わつたのらあまをきつ。心あはれ物日のたけあはれ

寛治元年。十首方合。子まをきつ

万里小路右大臣

今も程書つた。朝子。心あはれ物日のたけあはれ

都一らす

順徳院御歌

松乃栝葉はあつたれい雪まよとるをい音ひ春  
後二位家澄

あつたれ音ひの梢をいえて寒ふまよをたつ音  
人々百をうめされい次り

春上天皇

寒まよをい音ひをいえて也つらふもまよをい音  
前内大臣師

庭の面つらとをやすいといえて寒ふのまよをい音  
妙雪のらと お開白た大臣一葉

まよれを狂風さゆつ山陰よわて妙つ去年乃とる音

建長六年のこ首方合よ音

院少将内侍

白雪のあつすなりと音あつたれい音い音やゆなると  
子丑百番方合よ 源具親朝臣

春風や梅乃白いとゆをいん初来さつめ音あつたれ  
隆子よ山里梅よ音うさつあつたれと音

ら

権大納言長家

梅うさつあつたれ音やあつたれと音あつたれなりはくめとあつたれ  
位よねまよいけつ時うらあつたれと音

梅と心とけしきなりけり

石上天竺

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

建保四年百二十二年

西園寺入道前太政大臣

春風や梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

子五百番方合よ前中納言定家

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

後鳥羽院御歌

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

梅と心とけしきなりけり梅と心とけしきなりけり

野介震

土河門院水家

美のさる美れつまやこりりんゆらああむじうの原

建保二年内裏御方と合らまはつる所は

た〜んや

前中御之為家

あらあつとふ火乃聖もろのまはあふたつ美れ暁

洞院拾政家の百首奇の處

西園寺入道前右大臣

神代よりあし〜〜あそそふまは回れ〜〜美のゆがれ

後三位行能

持ちやの神は美はけてあはるいあふひさになり

又永平の内裏御方とあせ〜〜御とれ

美日望山

前大御言為氏

遠なる藤いそ〜〜みえわそあれら〜〜あつ〜

春は方の中に 太長清徳基氏

雲わらり長栄ようすむじのれあ〜〜海つ美れあめ

あ大御之為家

あが娘のあよれあつと美〜〜あ〜〜あああすし

又永二年七月白河屋あ〜〜あ〜〜あ〜

て七百首方は〜〜あ〜〜あ〜〜あ〜

山階入道たふ氏

あ上雲のいろをみえわす家てわつ布引の所  
名古首のうまの時僧正の意

仔細の海遠よりし海より夫の来りて何れより  
あはれ海よりゆりてゆみの巻

道因法師

甲子の浦の風色のよけを去日か霧そはよきうりけ  
海色の霧と云とと深後杉羽白

去霧あふいへ浦のうまわふ破らす波巻のこそす  
夜浦浦のこころと友原澄伝のト

よき浦の霧巻のあえ海より梢そよの松のむら

むらりす 友原の巻のト

立海の霧よ波のうりして破つ松よのころり風  
中務の宗尊の親王

浦をき難波の巻あふい入日よのうの浪海をま  
弘長元年の百そりなけり何れと

常盤井入の前の巻のト

乃らまの波ら遠よ成ふりりかよの巻を浦の巻  
建長二年の巻と合られつる何れ上

去巻 院弁内侍

漕河の巻のし山舟みえぬそよ入のよすの巻



文治柳態と云々 前開白たたる 一糸

枝より柳よりに詠めえてみりいあううまおひ詠  
建保四年内裏百番う合よ

西園寺入道おた政た辰

青柳の系とみりふるをきあつうまに何と深  
為中柳とつとを 種倉右大臣

青柳の系よりつと白露と玉とみまてまをさう  
題不知 六条入道おた政た辰

梅花とそひつ程より白ひ神よとゆりやいと  
建長六年二首う合よ梅

後醍醐院御歌

神よこらまそらまおの初もそあふらま梅うえ  
まはうの中に 前大納言澄季

初家梅のちらえのみて梅をのけ風よとやう  
家よ十首ううと竹ううふ梅風とつと

山階入道たたる辰

梅ういむらと里と句やし垣ひけと梅雲の中とせ  
建長六年二首う合よ梅

お中納言資平

梅むらふらと梅風や約人らととらふららん

むしらす

藤原門院少将

梅の戸をぬきよき梅にいまれぬえとくふ

里よ出さる人の心をまひりたれ梅苑と

おてつらすと 月花門院

色もよもさる人なりとさる人の心とさる

梅の梅とさる心とさる梅けり

鎌倉右大臣

惟少と色青とさる人なり梅もまよとさる

暁降る心と 友永信實朝臣

明く見ぬあま玉帝とさる心とさる梅とさる

光の光も入道前持政家の方合よ兼中

御前 洞院持政大臣

記さるてあふ御前りののまよく日ゆふさる

百さる方なり 入道二品親王性助

立ちさるあつとさる心とさる梅とさる

帰る心と 入道親王性助

まよよけさる心とさる梅とさる

尋心親王性助 梅寮使云通

考ふすあまも尋心山梅のまよ梅とさる

友永清輔朝臣

し女子の神つゝとてさそつた也の杖わくつらひよたり  
冷泉を政大臣の松の松はさあを頼りて  
坂をまつます侍たれつらりけり

院少将内侍

琴り小少ゆつとこれ松独らんとうきりりた  
弘長元年の百とてちもきりり松

前大臣言ぬ家

白雲松をいひつと松もはらさぬとありあきしを  
道一とす

順徳院御家

松花はくと刀もふさ松は松とのてつと松とを

建保四年百とてちもりける時

泰後雅經

立つらと松そとむと松の尾上の松雲とまらりす

道助は親王の家よ五十首松とてみゆり

小松松

西園寺入道おと政大臣

松はく山松よと松とてみゆりり松に松と松

建保二年百とてちもきり朝

坂久我を政大臣

山松の松は神や白や松と松と松と松と松と

松を乃中に

前大臣松

雲より暮れ橋と出る月を色にけりか歌のこけ

雅成親王

おのすも深の山はらう夕白くふ雲とそそ月を  
光の暮ら入道前接取た下  
橋をすも天さる山の目もけり夕の夕暮れを  
暮山去望とらふゆと

中務の宗尊親王

花の暮れそとも色あす白ひえをふすも暮れ夕  
山階入道たは長あよ十そさうのみゆけりふ  
考あ花とらふゆとそそけりうと暮ら

前内大臣云

夕のつゝ風乃つそけり歌のれそとも色あすも暮れ  
又永四年内裏の夕合よ暮自望ふ

お大納言良教

風乃つそあの下なるわらそ歌を今すも暮れ夕え  
前大納言を家々に百そさうのみゆけり  
友承澄祐の良

夕をよそ海とそそは橋をけり夕ふ山よ夕月け  
大納言通方益人政よゆら町内り暮  
ともあひく月あさ暮人始後らむあさ

ついでにさうしてはくさしきり

土御門院御歌

あかぬ梢ふらふらかきくぬ花と月よきれも

むしーらす 系極前園白家肥後

まの秋の梢よとら月の色とほふまうてあきま

後鳥羽院御歌

あかぬとらふらふとほいそと星の光よこころ

あきまの月

續拾遺和歌集卷第二

春二下

むしーらす

後二位家澄

まのまの梢にほまかせま柳のうらさこそ綿ぬけ

子五百番の合よ 皇太后交工事後成

白あよゆふまそくろり柳葉よ梅咲そふ阿まはくふ

守元は親王家よ五十そ方よみ約けり所

若輩の歌の山りやふふらんそ山へ白ふ影の志く雲

むし歌の中ふ 友原澄祐朝臣

山様おしよあまももはらりそり雲の歌の深の袖

山階入道たる臣家乃十首方小書落宛

指中細云云也

朽社と云り小なりは標記を記して白ふまは約落

文永二年七月白河殿ふくくくむと云

つて七首首方はくくまうりまうり時元面人

とふふと

友原光俊朝臣

本ありと云らる日敷つりつりおいおてんやむと云

むしらす

後醍醐院御歌

吹風乃さそふいとまふそそゆと志さめぬ歌の宗

平忠盛朝臣

いづくともまはいとみそそふりまうりまうりまうり

平春朝朝臣

かめいとめりおれをねり新小白ふ歌の云云

寶治元年十二月方合よん歌

皇太后后文久手後成女

まは又歌の都とたりふり標よ白ふみくしの心

弘長三年内裏百そ方なす一町ねあ

ん

前大綱云為氏

昔時ついでるまうふりおらん尾上れむと書家云

百そ方なす一町

指中細云云也

今も又昔もくれまにわかく物心いさくせとみる  
内よりやん様とめさしけりふそきてをき

お大納言資季

九重の中らうれ宿のやん様まことさして君をみま  
前中納言定家りといふ様よつまをけ  
うーけり  
うーふんふんをるれ宿うまやまをいふ

見花日書とつて心と

中務少輔平親王

まはれみ今まにむとのこころをうふそとつて人

都ーらす

後鳥羽院御家

昔もれおまへはの形見とそ志願の節よとつて  
前内大臣基

らぬまの尾上の様おてみぬ人も思とつておま風  
院弁内侍

そのつて風をやせら白雲とつておま山様れ  
西行法師

年とつて物もけしむと山様もふんといふすかたり  
平重時御片

山様やあつて様永日ふらけはけきまら山様を

道助法親王家の五十首小山様

参後雅雅

わたりりといふ事とも極むるものなりしは是れ風  
百首方合し時 友原為世物長

風ふおあふそめれものふ云もふりふを言の  
建保四年内裏百首方合し

後二位家澄

ふりせふららんや極歌をらりしは是れ白雲

又永享年内裏詩一首合し白雲

後二位行家

みまをいふの子粒よりらんひく家とそむりし極歌

建長六年二首方合し極

前中納言雅言

わたりりといふ極目極りしは是れ白雲

新の方合し中納言 正二位知家

ふあふらふらふと吹風よをいふらふらふは是れ白雲

常正もといふ心と 後二位成實

極歌の雲がその心風は是れ御のおまをいふ

もいふ 参後雅雅

家と云ふは是れおまをいふ事とも極むるものなりしは是れ



建仁元年五十三年をける時

前大僧正慈鎮

と志の松と雲林のむとて海の波をすまをひり

雲林院のむとて 友承基俊

今まの我やゆつら山樞乃の杉りはしとあふじん

百を方れ中に 或子内親王

吹風ものまれば成るまのうんと花のらうみん

西園寺入道前を政と臣家乃三年を方れ

信實朝下

雲よりもよそにぬれつらうとまの樞嵐ふくら

建長三年吹回ふく十を方れをける時

前大細云為家

あらゆふおふとまの山樞雲のつらこは花のらうん

まの方の中に お中細言通房

うさねおわつらふや山樞らりふとのゆをみぬ

新臨落花とらうん

権中細云通俊

あふ花ゆふとて言おまの物らたもひふるま

山樞落花 澄覚は親王

誰かよわくははぬ山樞を我とまのゆをみぬ

庭落苑とてふとての事せ給けり

と上天皇

今いとらうとての事と柄し庭をあたふといふ

西山りうとてふと見よゆりてふみゆ

けり 入道内大臣 保道女 乙卯乙未方男

山標らふとてふとみみ人崇し柄よの事と風

中務卿宗尊親王家百とてふと

亦た昔未時考定

神とゆふとてふと山標風の山とてふと

百とてふと時 善美大寺又善美

為る人善とてふと記りふ志賀の部とてふと

寛治二年百とてふと

皇太后后美大寺又後成女

昔とてふと柄とてふと庭の記りふとてふと

弘長三年内裏百とてふと時庭上落也

権中納言平

とてふと庭とてふと庭乃西とてふと

堀河院此時名解庭とて池上苑とて

梅とてふと 大納言後時

おとす波とらうとてふと庭とてふと池とてふと

建保二年のち合よ河上苑

順徳院御製

若狭川若狭のあはれを乃多よ山をふもてあはれの下せ

まふ乃中に 後二位親家

よりの川流はなつたう山様若狭す波のむとらじ

百々乃ちも 侍後雅有

けしき乃若狭様やまは川流て閑と成はりうん

建保四年内裏百番奇合よ

常盤井入道おと政大臣

泊瀬河くふ乃みあはれ消えはま河くくくせは白浪

後久我太政大臣

心河のまのあがまあ大風よと海くね苑の志くみ

都一らす 後鳥羽院御製

らるも瀬く乃若狭やせうり足様よ出まは山川

後二位親家

足曳のみぶくれよらるも山をひく出ま若狭の水

入道二品親王の助

吹風や屋らりもよは若狭乃もれゆく志と行てん

藤原門院少将

ふらふしあみね風のつもよそあわらむと雅有

院弁内侍

嘆ふ花のわさふり終て雲は由おまの山嵐  
系極入道前冥白宇治とて衆満殊花を  
いとよませゆき 肥後

立くは衆そつとて山極風は殊とまふとて  
花山院花は後せしけり水よりよまひりて  
為花とてつとて人々よみゆきりて

前大納言公任

又つとてつとてつとてつとてつとてつとて  
百とてつとてつとてつとてつとてつとて

順徳院御覧

君とのゆきりつとてつとてつとてつとて  
弘長二年内裏百とてつとてつとてつとて  
前大納言公任

去のよれ衆あるまらひつとてつとてつとて  
又永二年七月白河殿とてつとてつとてつとて  
つとてつとてつとてつとてつとてつとて

春月

後醍醐院御覧

可く光るつとてつとてつとてつとてつとて  
深夜春月とてつとてつとてつとて

前用白た大臣一系

晴まにらりやあくはめてふもあつ月ふよそ文よけら  
むしーらす 常盤井合たあを政大臣

行むを雲れつての影もむと裏てゆら雲るよ月  
苗代と 後二位家隆

去くまられ回れ枯よ引あや苗代あれあしあ人  
先後親臣

遠近の苗代水よせさうけて去の河みそわわ  
道助法親王家あ干すうれ申に河助を  
正二位親家

右野川おまぬあふ袖あまそ彼よらりふなる山吹  
にたり心と 惟明親王

ねてまもむいあむい山吹めをれうふす井その川彼  
むしーらす よしんあ知

ちりあを井その山吹ふふす山吹のさうりやん山吹  
徳倉右大臣

玉もろ井その河風吹よたりみかふふふ山吹の花  
弘長元年百そうりやけり河助を

前大細を為家  
ら道に河波のをそそそやわてす風山吹のむ

藤

仍乃花とてその松の梢とてそそぐ心ふらふみ

寛治二年百三十三方めけつ治よ松上友

後醍醐院御製

ゆふみより色とらぬ松の枝は友よりまはたせられ

土御門院小宰相

いふてとれたの松はあふ枝よりけり友のせよとてん

土御門内大臣家方合よ由中友花

前中細云定家

志のそけ神おせとや友花まいつくの由よはくらん

寛治二年百三十三方まげつふ書ま

お内大臣基

里わすおふりつふりまよと我を別と誰行ひん

おふりつふりつふりつふりつふりつふりつふりつ

つふりつふりつふりつふりつふりつふりつふりつ

つふりつふりつ

續拾遺和歌集卷第三

夏三

寛治二年百三十九

後醍醐院御製

わよれ年とよもひてうけ道と頼ひとくわなをれ

山階入道たまた

きよもそやとあ人の白妙はかたはてさうら輝のそな

星橋よつきて人ありとつらうけ

赤深忠

さうらとひこす橋もまらさあまのこみ道

むらさ

衣笠内大臣

郭公あはれとこりあういふまこころは初音あん

後徳大寺たまた

我半しとあふとさうす何事約えぬれあわむあは

平政村御下

何事社ねあはれとこりあういふまこころは初音あん

前大細公為家

郭公約とつらうの経来よ初音は月の歌そのゆ

待郭公とつらう

源為氏御下

兵部月をたのむ所ありしりしはらふりかた

にたりしと 中務卿宗尊親王

約儀として書しぬ部云ふつとあるは書とあり

右近少将通基

見らるる言ひなりしはこれ部云ふ

右近少将通基氏

いふ所のありしりしは部をましてさうぬ初書人

右近少将通基氏

りしとす

省に惟ふまゝぬ所ありしとすは初書人

夏方中に 大納言經佐

ましてさうぬりやわらん所ありぬよきそありし

和泉式部

ゆね大納言人なりしとすは初書人

後二位家澄

白おれおなりすしり所ありしや卯月の玉川乃里

光俊初佐

さうしらすは初書人なりしとすは初書人

信實初佐

一初れおなりしとすは初書人なりしとすは初書人



岡部とてふと 友原隆持朝臣

一都乃あぬる妙と郭とていふよりして行なはし

遠守阿多とていふと 保道少

とらうあや一都乃阿多人の心とていふは

都乃一都乃とていふと 醍醐入道前太政大臣

郭とて一都乃とていふと 後鳥羽院御家

後鳥羽院御家

阿多雲のつとふやとていふと 文治六年

文治六年 出内田の屏風

後鳥羽院御家

とていふと 郭とていふと 誰とあぬる妙と

後には 入道 赤白衣大臣 徳らう阿多とていふと

そとらう阿多とていふと 後惠法師

そとらう阿多とていふと 思ふはしと

そとらう阿多とていふと 兼超法師

とていふと 郭とていふと 幸ひとていふと

後二位 兼政

郭とていふと 幸ひとていふと 幸ひとていふと

知月のつとふとていふと 小津乃國とていふと

よとていふと 徳因法師

三月より難波の浦の郭にありてあまたあかきありてあり

葛蒲とよもゆき 前中納言雅具

あやめ草一束つらり枕にひしきしきしきとてあかき

百首とよもゆき 大上天皇

あやめ草つらり三月よりあてなりてあかきあかきのあかき

正治二年はるる院より百首とよもゆき

前大納言澄房

あやめ草つらり三月よりあてなりてあかきあかきのあかき

建保二年はるる院より百首とよもゆき

あかき院の定家

あやめ草つらり四月の株をきとてあかきあかきのあかき

百首とよもゆき 前内大臣

橋のけふむらさきとてあかきあかきのあかき

実治元年の十首とよもゆき 五月郭に

右近大将通忠

橋のけふ五月の郭にありてあかきあかきのあかき

百首とよもゆき 如新法師

あやめ草つらり四月のやれおのむらさきにあかきあかきのあかき

前内大臣一条

あやめ草つらり四月のやれおのむらさきにあかきあかきのあかき

権僧正実伴

みづせいのすしけののりほゆの善れ五月ぬるは  
百さうりまのり 善文をす又の善

晴やぬ日敷とさうていぬの云もしうさうりぬ  
弘長元年百さうりまのりけりぬ五月ぬる

後醍醐天皇

ぬさてゆとひまうたきけむの善やむの育ぬの  
洞院抄政家の百さうりまのりぬ

前大納言実家

ふさりのふしむももなりきり浦のみかた五月ぬ  
のり

部一らす

右京忠實朝臣

のりして若さるぬくすゆをさか河の五月ぬは  
百さうりまのり 侍後雅有

五月ぬるの河登りぬのこえて海舟ふぬる二午の松  
前右近中将資盛家方合し五月雨

皇太后后実家

育ぬの雲ももなりさす河社いふ多とさのふもん  
精河とさせ給る 後醍醐院御家

りやいぬをせと波ぬりつみかさこのり精綱無  
同五月のついでらふらふらと給り

権大納言云矣

みづはなる春とそよふ河をわたりてさ月と月とをまて

百と云ふあふれはよと上へ天に望

あつちやれま屋の影しれ籠新よの甲より種をぬきぬる月

梅家使高定

涼とあつちもみち石をまら水ふ新みち夏は月

依月夏涼とつららんと

修理左大臣政季

たつしほの涼みとりなりあのみ月乃種よ風や吹ん

大納言通方人つららんとつららんとつららんと

ゆきつよ夏涼月 涼有長船長

夏とあつちのまことらぬてあてらすしよの月

夏涼百と云ふあふれはよと上へ天に望

藤原門院恒馬

ゆきつよ夏涼月 涼有長船長

つららんとつららんとつららんとつららんと

法皇尊寬

ゆきつよ夏涼月 涼有長船長

夏涼百と云ふあふれはよと上へ天に望

入道二宗親王太子

石上ふらの中々今更よふと分くく後々草草  
兼久元年内裏方合よふと色々草

信實朝臣

そのつゝ中々此のふらんとして三年に志き草草  
郡一らす 土御門院中

草草此のふらんとして三年に志き草草  
家よ百首方よりみゆき草

中務之宗乎親王

よりふらんとして三年に志き草草  
浦雲とらんと 如影法師

ふらんとして三年に志き草草  
郡一らす 正三位知家

草草此のふらんとして三年に志き草草  
雲火乱飛秋已逝とらんと

土御門院中

小藤原よのふらんとして三年に志き草草  
実治百首方よりみゆき草

藤原朝臣

信實朝臣  
心と 宗道法師

昔河の川を過りてみくもくを吹り雲を千尋の底に

前開白た大匠一糸 完

くはりの程よりあまの天雲のよきに如く夕立の

後鳥羽院御製

夕立の晴れ嵐の本村より入日涼を露のあま

百首の方を一時 式乾門院御製

夕立乃名残れ露をそよよと吹くはつらり乃庭の

夏の方の中に 前右共東鑑を為敷

露ふくまの庭の浅芽小風とて名残涼を夕立

泰後雅雅

露まよふ日影よりひく浅芽生のそのつらく夜

弘長三年内裏百首の方を一時 松野

前大細云為氏

けりくくねよ鳴くくく蜂のしれ夕日とらふく

建仁元年五十首の方を一時 松

お大僧正慈鎮

夕立の程中れ松の下陰に秋風とそよ日しの

細涼乃くく 順徳院御製

夕立の板井れあ乃若花秋風とああつらそ

建保四年内裏百首の方を一時

前中細云定家

なつらう秋もらうき河風よ岩波たうらう志中

日年百そそをひの時

西園寺入道前を改名

御後しうおさそ丸あふと十月の空に志中

秋風そそ

續拾遺和歌集卷第何

秋奇上

くよ百そそをひの時

冬上天星

今物らう秋と風のをとふ事ふとくらの身そそ

初煉乃んそと 光の空も入道前を改名

と物らう秋と風のをとふ事ふとくらの身そそ

冬上天星

冬寧指帥為經

蝶のこれ梢ようすそそをひの時

道助法親王家五十首方よりありし心と

徳三位新能

風の音をいづるらん輝いさそまは後第生れはのよき宗

都しらす

後鳥羽院御歌

いづるは萩の上とも昔伝て神よまらるる萩の初

光の音も入道お持政家萩乃廿首方乃

中ふ

院少将内侍

蕙のよき音もまほしけのよきれや吹そむら輝の初風

初輝乃らんとよませ給へけり

後醍醐院御歌

いづるもふなとまらるる松陰の岩井れあはれ輝いさひり

寛治元年十首方合よ初秋風

右進大將通忠

豊登のやうなもわぬ松風の身よりむきは秋風

弘長元年百首方合けり時早秋

兼内大臣基

秋のみゆらけ松の音もそし首は秋と輝の初を

秋方れ中に お久僧正澄弁

いづるは風もそまはるるはの波も輝もあえ

弘長三年内裏百首方合けり時七夕



権中納言仲平

七夕の雲は夜の梅風よあふたのこもやういゆらん  
七月七日のふいひうら契なりらんをけり  
人のをさるよ

堀河院中女上総

契きんぬれも彦星は形をさのやいぬこも  
七夕のんこ

権大納言実家

涙ぬ契りよそふ天河をせいの一書おれも  
修理左衛門康

修理左衛門康

年ふまらぬいそけいそ天河あふせいらうら海り乾  
百首うらうらせけりけらふ

後鳥羽院河原

彦星がけりの玉や海河あけ糸の露ふまらん  
久安百うらうら

待賢門院堀河

うらうらあぬいそまらうらけいそ立うら天のな  
七夕の後のんこ

法橋形昭

立ゆらし糸の海よ七夕のけり玉は教やまらん  
入道二品親王の家よ五十首うらうらみゆらに

秋の寄

津守四助

今うられ露よつらと萩の葉よ海うら梅を吹  
弘長元この百うらうらなけりう萩

常盤井入道前を以て

秋のふた風すつりよの夕言と昔伝ふて人の心也

鳥羽院出河乃前裁合よ

修理大夫政季

秋のふた人約うとて昔れれと秋のふた風よおろるは

都一らす

順徳院御裁

物人のつむぎの露れとてまき末とてと秋風そく

くふ百そつりけつ決よ

し女子つ玉りのとそやとつりつらん整鶴うらまはれぬのつり

建保二年五つう合よ新臨妹

皇太后文孝女後成女

虫のねと秋身ひつりぬ風よ露分りつりよの藤原

秋乃方れ中に

前関白たふ長尊

夕言い我身ひつりぬ妹はとわぬ物ゆわぬ神

藤原法親王

心へ御て物とつりぬ我もあふつりぬわさけつり

述懐百そつり中に

皇太后文孝女後成

友へ御風あつりぬわさけつりぬわさけつりぬ我をふ

都一らす

長尊は御

うらまを世ふらぬ友へ御風あつりぬわさけつりぬわさけつりぬ

よもゝ心三つ

よもゝふとせしむ高も枯風吹半つあひくえ  
新踏落とつこころと

有原澄祐朝臣

袖つるをさくつんかかるとくも枝に花よ枯風そそ

建保四年百書方合り

順徳院卿家

夕音けまうた乃輝の花落をさくあね袖とそそみ

秋方中に

後二位家澄

輝ふりしそ雪の落打あひくさ書り風よ鶴はくあり

建長二年八月十五秋も羽殿方合り雪の

有原

前内大臣師

萩う花誰あつみと人鶴あくいとしの雪の枝の夕書

萩の露と云と云 権中納言云守

し〜ぬみ心をさく〜露の枝よ露もつゆさつ輝た

野一らす

土御門院卿家

露もつゆさつ庭の枯風よ下葉もさく露もつ

野花梅庭と云と云

有原範永朝臣

心ありそ露やさく〜人雪〜りも匂いそまら秋露  
也

秋とよませ給けり 冬上天皇

文政の本れ下流もをみえてうつりそまら秋風の  
野麻とつらんと 後二位忠通

もあめりてゆれ小秋とつらやうらふも小麻の晴  
入道二小親王家よ五十そつらふみ給けり  
まふふ事又實通

色らう小秋うりとい露りそ秋の晴風小麻の  
風前麻とよと 津守隆四

こよのよと晴れ言の麻の晴て小秋多つて秋風を吹  
秋分中に 蓮生法師

秋露乃吹てらりわたり露よ程立ぬそて麻の晴  
春後

つまらう麻の波や秋露よこわく福よとけりそ  
院少将内侍

いふ吹秋の夕れせぬ麻乃ねあつみよとじん  
後二位光城

秋とらじと福の夕のよ麻の波にまらるる  
建保二年百そつらめしげり次よ

後鳥羽院御歌  
露よふと晴の夕系と晴よとよとてゆくはと麻

野一らす

皇太后御交々御成女

秋風よと山の麻の節立て露よと花よとの節よ

建長二年九月十二日十首言合よ書山

麻

入道右大臣 定雅云

秋風よと山の麻の節立て露よと花よとの節よ

夜麻よと花よとの節よ

祝部成良

と砂れ松の風よと花よとの節よ

建長二年九月の節よとあせしけりる時山

中秋具

入道因大臣

是月乃山をせらむと月影よらよと花よとの節よ

野一らす

後鳥羽院御歌

とさうら月と花よとの節よ

兼曆二年内裏言合よ麻

権大納言云云

音よと山の節よと花よとの節よ

初節よ

友原為頼御歌

秋風よと山の節よと花よとの節よ

弘長元年百言言合よ時山

前大臣云云

今より秋なり金枝風より秋をさしつゝ鳴きあはん

秋のふれ中に

寛仁法親王

とよりの雲井の宿を都へそめ輝風さしぬまはる

善天國宿とらふん

太上天皇

をらる都の宿りて夕を暮る雲れつゝ小宿の鳴ん

むしらす

藤原門院少将

夕の暮りより夕の宿に宿りて秋風さし小宿藤原

信實卿

宿りて夕の暮りより夕の宿に宿りて秋風さし小宿藤原

百々々々々々々々

権僧正実伴

ひらめり雲れぬえまに宿りて夕日らるる秋の宿

むしらす

普光園入道前書白太

みまをの山を登りて夕日ふむしらす秋の

ひらめ

堀河右大臣

とよふり夕の暮りより秋の葉をさしつゝ秋の宿

百々々々々々々々

友原為世卿

とよめり夕の暮りより秋の葉をさしつゝ秋の宿

秋のふれ中に

常盤井入道前太政大臣

伏見山麓の暮りより夕の宿より宿りて秋の宿

宿

弘長元年百三十三方をきりし時方

前大御を為家

約物を風の山の巖晴て標とてくちの川のり

むしらす 中務宗尊親王

舟よすを方人の袖みえて夕ふりらすと標の川

百三十三方に 前中御を定家

わのくと我よむしらすの勢よめて蓋やれ里よ枯風そ

又永二年八月十五日夜方合よ未出月

武靴門院内運

約物のやいへしけせとや標出やぬ秋乃の月

秋方れ中に 正之位知家

しとまら神の枯風よ流て標出そら山の月

建長二年八月十五夜方合よ未出月

前風 院少将内侍

山のと出くさやけさ月よ標光とて秋風うそ

むしらす 後鳥羽院内運

天原雲吹りぬ標風よ山のそさくしらす月け

中御を教良

出らり雲吹りぬ秋風よやそと年あふ山の月

九月十三夜方合よ未出月

去交平又美意

足安の世にふりて元とて雲とて出月ひ  
部一らす 平時村

ひ雲とて心とて心とて遠く出くすあつ月影  
秋の比法傳寺あつみ約ひ

前中洞玄實實

御世の部乃元とて雲とてつてつてあつ月  
林信月勝とつてつて

後曉院河

とつてつて心とて心とて本世の月乃影り

建長三年九月十二日十首方合

月 冷泉を政大臣

幸とつて光りてつてつてあつ月影のあつ月  
月方中 中務卿宗并親王

とつてつて心とて心とてあつ月影のあつ月  
又永二匹八月十日合はつてつて

後二位新

今より板井のあつ月影のあつ月影  
部一らす 右大臣

昔よりあつ月影のあつ月影のあつ月影  
さつて



約運と

後醍醐院御教

年々くく雲のふくまぬ好の影をうつらり月の約

正三位知家

夕暮れ月よりけさの雲をよそよそとあの下くくき音あ

前開白一系家百々方よ雲月

約

前大納言為家氏

お坂や鳥の空を乃開けたりもゆぬとみえてよあつ月か

開路月とくくく

た京大寺殿捕

相討の雲は清なるありせいのそく月の影とよあは

續拾遺和歌集卷第五

秋奇下

野一らす

信實朝臣

月影を影多ふなりぬ橋姫の夜やうすき宇治の河  
を  
そ掌権帥為座

橋姫のくまく袖を影や多き月ふれえら宇治の河

くまく袖とさかりてふけくまわし次月あ

叱咄とつらとよませ給けり

太上天皇

嵐ふれり月影はえては瀬乃舟そらうそあ

又永五年九月十二日秋白河原五ヶ方合

河原流月

前大納言為氏

新やうす月のうもひをそそりともあはれはの河

野一らす

侍垣能清

らりつらぬ葉あはれと音川月あもあはれ秋のみをり

文永五年八月十五夜内裏より合は河月

似也

典侍親子朝下

立田河原とす浪のこわうとゆきまがはれ月あ

月乃方れ中に 前大僧正慈鎮

てる月の光とよりふたりとこそそそるはあはれ河の

建保二年秋十首方をなげ河

後久我を改るは

右の河津川岩村の峰の月やうらとすきと新しき

子五百番方合よ野又た大は

甘きとむらさきのあよすむ月や弦かしくらあは

むしーらす 平政村朝臣

と舟くかりはの蓋よなく露れ玉くさる月をさ

惟宗忠系

秋舟くゆくの海を志す風よあはしくとらぬの風

平清時

さひ心浦のうらたむらぐらひてやみま枝の月

文永七年八月十五秋内裏三す方よ海月

とふよとよ 右善清管實を

は、鶴や秋とら月の新しえて破すは秋風そ

弘長二年一日百と方よ 河浦月

前大納言為氏

と海の浦や開のうらまをて立波と月ふ吹とす秋の色

光の景も入道前按政家の八月十五秋を合

よふあ月 後堀河院氏部で典侍

清久方月のそよふ雲もむらとつらあはの秋の夜

月方れ中に 冬蓮法師

清く月と心影の村雲ふりのあはれ燈あり  
弘長元年の百さうさうをさう何月と

冬蓮内大臣

新まらう生田の枯れ秋風よとてさる里と月や

文永五年八月十五夜田裏方合し田家

見月 後二位新家

いふふく蕙のまらやれ梅風よ福ぬくとをさる

建長三年九月十三夜十さう合し

田家月 前内大臣

独と心田れ庭の月影よ我のそとさるに色

群らす 安嘉の院宇条

風の音を吹まらさうとてに我のねえれ梅のあり

前摂政内大臣

月なくも梅や音と志のまそとて身あり

あ久柄云為家

梅とてととららゆいしと梅影あり月と

建長二年八月十五夜鳥羽殿方合し

月前風 後醍醐院御製

いふ乃風さるぬ我宿の住らしてさう月とみ

光の故月と云ふことあり

皇太后后多事後成

御進心され秋と云えたる昔と云ふ月を

月乃方と云 式子内親王

なりし進心と云ふことありし未しと云ふ月を

弘長元年百三十一首方を著す時月

後集内大臣

鶴乃と云ふ橋を白舟れ初観いそく殊の月ひ

家よ月五十一首方と云ふみゆきと云ふ

後集後拾政を改たす

山と云ふと云ふ行はる秋の月より初よのころ白雲

建保百三十一首方を著す時

後久我を改たす

月よのころと云ふと云ふ行はる秋の月より初よのころ白雲

建長三年吹田少く十首方を著す時

村奇 尾普東信家

月よのころと云ふと云ふ行はる秋の月より初よのころ白雲

村奇 尾普東信家

月よのころと云ふと云ふ行はる秋の月より初よのころ白雲

如教法師

後のききめいなるはゆいひのしき芳にのまらぬ月  
家言毒多ふ余 後系極極及前を改て長  
心ききいし回れと志ふ事か晴てわらふといふ心しき  
先時異の寺入道お極及家極の可き事  
中い  
光後朝に

前田大長基

夕白らとし回れ極のいふ造りさうしりといふ  
心階入道た大長基の十首方より田家輝を

前大納言為氏

露霜のそそりてあを付てりるるしき秋の心  
秋方の中い 権大納言長家

小山田のいかりと志のいふ露もいふすしき  
秋衣の心と 順法院浄慧

しきあのおれおししと智と志とをいふ麻もいふ  
後系極極及前を改て長

ゆらとさうし極人極といふ都の月よ衣らあり  
家よ五十七と方よりみゆげり時

入道二品親王性助

をさあす露はささむさ月影よあきて来秋をさ  
むふ知 右近中将経家

秋風の力よまじりし里人やん善信てあふらん  
光の影も入道お抄改家の方合し風前  
抄名 洞院抄改た大信

りて吹まらるる屋の輝風とまの秋をささるる  
淡抄名とまよと 祝部成賢

浪よすまの浪への浦風よと秋もささるる也  
秋方の中ひ 権僧正實伴

浦風や秋をさし難波人蓋火あもるる也  
津守圓平

あふるる秋をささるる里まの風もあふ  
野亭抄名とまよと 梅家使了定

秋露の心よ燈のり屋ふをささるる也  
むしらす 前内大臣基

いふせんお宿す人ともささるる秋の樹  
建長三年吹回あふ十首方ちもささるる  
常盤井入道おたけを信

うらむ蓋の末葉よ風さして入ぬとささるる秋のむか

子五百番方合よ 前中細云定家

しよ〜れぬもやあひ〜〜枯て床をゆ〜〜不輝風を吹

秋方れ申し 赤内大臣基

みまのあさらう上葉枯風よ色つさぬもや鶉鳴ん

光の葉も入る前指家秋の二千す秋よ

後二位の家

わすれぬのしりいもやさ〜〜下葉枯の庭の枯露

む〜らす 西行法師

輝風よかと思波うら〜〜や下葉よ虫れ都よあは

藪虫〜〜と 大宰権帥為経

虫の絲を枯〜〜あつ長月の後芽う末の露か雲の

田入信

草の原初霜よ〜〜月影と秋を〜〜はてして虫や鳴ん

白河友七首首方よ水色と菊

後醍醐院御衣

汲て〜〜子とせし〜〜のそと〜〜れを〜〜おれて〜〜わ〜〜と〜〜霜外

む〜らす 光の葉も入る道前指家

露葉のを〜〜あ〜〜ぬま〜〜に深〜〜て〜〜り〜〜と〜〜と〜〜を〜〜秋の〜〜

建長六年冬山友と始〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

と〜〜河よ初霜葉と〜〜と〜〜と



昌隆入道前持政を以て

そと露やそめりしん秋の時のむとましくも家おのり

前中細玄資平

嵐ふたりのあめとや紅葉は河をしもゆてくるまど

秋争とそよみゆり

山階入道たふら

吹たつむい山風のあじふまゝに木葉乃久そころ

文永五年九月十三日秋白河原五そそ方合

言ふ山紅葉 後醍醐院多田

何むゆく雲乃そそなるりみらるる夕日深うくそあ

百そそ方な一吋 権中細玄云雄

紅葉はよその日敷いのれた時あよころ秋のひ

弘長元年百そそ方なもきり時紅葉と

常盤井入道おを政た

夕附日ころふそれ雲まのり光はそふそりのみら

衣笠田久信

立田娘いもや梢のうらほさそりく人輝のまそそ

洞院持政家百そそ方よ同一心と

藤原門院少将

ら面いも葉多付程りり何あよそらぬ輝風も

郡一らす

友原宗徳

河原の生田の枯れりみらりてとまるとしてやまら

建長二年九月の寺合は山中秋真

前右兵衛尉為教

山室の木の葉はくろり下草ひて程とらん

紅葉とてしをせ給けり

と上天皇

紅葉といふは一人とてん河原の雲はとまのころ

義久元年内裏の合は紅葉

お中納言定家

りつと木の下のそそとてくろり我袖のそけみら

紅葉はくろりともくろり

位曉院御家

枝のすしその紅葉よりして秋のまはるる

贈た大臣 と美家の合り

た京平又政補

秋のけけりそむらとてぬりぬり

輝奇れ中に 後法大寺た大臣

山影の急の海や深つらんれあめさき

正治百それふ 後系極務政前大臣

音回らぬお葉の陰みえておこゆの世は感ふ  
子五百番奇合よ

昔の上小嵐吹く〜〜〜  
都一らす 中原師光御下

高ぶる昔よぬを〜〜〜  
平親世人〜小方〜  
つら〜けり 前大僧正道玄

みらぬ中〜〜〜  
名取百首方め〜〜〜  
順徳院御歌

音回本葉吹く〜  
建保四年内裏百番奇合よ  
常盤井入乃前を返る

紅葉らる河を流るり乃字のま〜  
紅葉浮水〜〜〜  
ほ三条田大長

あらや言の枯の御見りみらふ〜  
百首奇合時 入道二品親王性助

とあせ川紅葉と〜  
善秋乃心と 前大僧玄為氏

山と麻の都よりわつと小倉より日だけ小秋を言  
先師のちり入る前接及家秋の二千そふ  
お開白たたは一糸

秋うらまのうらまをいしてわす時をたふはふ  
むーらす 衣笠内大臣

そめと霧のうらまの袖をきて秋のうらまの  
西行法師とそめゆけり百そふ方れ中ら

た道中将公卿

終末行む徒の霧れやゆめ秋乃名秋なる言

心落百そふよ 式子内親王

とくそそふひりり乃秋のそふ雲も

くらとそふ

續拾遺和歌集卷第六

冬

初冬

坂鳥羽院

冬はさそりみら吹おろるとみ室山風の来し能く

院并内侍

冬のはれふい山は村田をふくとりふとらう本家

道助は親王家の五十首方よ朝時雨

正三位知家

ものふふとと物いさう推承言ひととふ時家

子五百番方合年 土御門内大臣通

何ふととたふらわん初冬月つとめこれ枯る葉の

小侍後

音つきて枯るおろいけくおとんとあね初何ふ那

百首方合年 春之末実徳

吹まふ風はゆせくこのめいさうと雲は紅とさ

形一らす 侍後雅有

何ふ葉のよ吹くすあししは何ふてつと藤のさ

前大納言為家 百首方合年

如朝法師

きふし又ふととふいさういさういさういさういさう

冬之れ中に

前用白たたはる

これらのおもひをなす雲のうらみ方程時を以

順徳院御歌

山風は河をやとくぬらん雲ふたもぬわりの月

菅原正直御歌

深のすも木葉もしづか神玄月程も河を以ては

菅原正直御歌

神玄月とくくまに晴りや梢よもぬ木葉ぬん

平政村朝臣

とゆふく物ともみえぬ木葉は河をよそて嵐を

た道中將家歌

嵐吹木葉よきとらんそとにれやぬ村雲のそ

百のうらみれはそと上た星

神玄月とくくまに晴りや梢よもぬ木葉ぬん

友原為世御歌

村雲のうらみれはそとにれやぬ村雲のそ

落葉と

中務宗平親王

ひく雲れぬ方とそとにれやぬ村雲のそ

式乳門院御歌

木板の風よとくくぬ葉や雲のうらみれは

後二位忠道

高田輝あきらいさなりはを長也本業はをれとらあゆり  
弘長元年百三十五才一吋あり

前大納言為氏

みらりの秋乃名孫れとら我とのさぬ本指せ  
くむむとさなりてをけりしはとらは業  
浮水とつくと 七上五五

大納言とれは秋のちとめておとせし若なり  
名業をなげふ 深具親御片

名業はふりはせり大納言えぬはれはとる

むしらす

土御門院山家

橘姫の使やろよおわん本あひかり御宇治の綱糸  
後京極坊政前太政大臣

あつるくぬをよれらして本業や親の下に橘あん

平政長

乃秋の病とわねよまうくむの病とてなぬる

前右兵衛督為教女

あみえぬ指聖乃弟れとらあしし病乃孫と結ふ物  
百三十五才一吋 あん細玄資季

今より名業は臣白露もこむる親と結ひし

惟明親王家の十五

前中納言定家

神女月言やと日の色をいと霧の下葉ふせと麻は

しりす 順徳院御歌

山室山輝の色をいと霧のうら木は下葉

お開白たれた一葉

しりぬるに柏の宿乃冬葉よあすも結ぶるは霧

土御門院御歌

くめりりやを柏は我宿は後芽り霧そむじりぬる

しりぬるに

霧さつと庭の後芽れとあすも小納言言をのこり

小侍後

とを柏の後芽るははく冬葉もをそ秋の色をみぬる

後京極坊は改あたら改大臣

秋の色はを柏整とぬおとと月は霧はう光あられ

建保四年内裏百番の舎り

常盤井入道前太政大臣

りみらに星かたの色をいと霧のうら木は下葉

冬月と 権大納言長雅

さるる書とよゆぬあられを川らわると月の光あられ



友原基繼

薄のそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月  
貴法百のうらやまをうけり豊明節舎

冷泉を政大臣

ふあひのこゝろは月をそと雲力の庭より出りし人  
百のうらやまをせ行けりふ

後醍醐院御歌

しあひの袖白あはれおそく豊明と秋やうらやま  
むしらふす 公卿門院御歌

秋のそよ風のしづかにありける月をそと雲力の庭より出りし人

夕のそよ風と秋萩のこ風

系極院御歌

夕のそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月  
をそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月

夕のそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月

権律師公歌

秋のそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月

後惠法師

秋のそよ風と秋萩のこ風は空のしづかにありける月

系極院御歌

空を飛ぶうさぎは鴨のこを枕せやうとておひそく

宣秋門院丹後

くまの親の神よふかしくは麻乃々の独は

西園寺入道前右大臣

山川のみらけはあすもあまのまゝりらとく月とを

子五百番う合よ 前大臣忠良

ゆえゆきい谷の下あきもえて独りあな松を

平宣時

さゆやとくがく傍にわら松よりあな浦風は

乙巳頼重

岩より波のこくみきとめてあしやうはあな

洞院坊政家百首あはあ

正二位知家

せうわら波のきしへ松さむとわらわらあな

建長四年三月河内

冷泉上二政大臣

風とる宇治の川あしらの松よあなとく潮は

兼中細玄具房

ゆえきあなわら松のし枕あなとくあな風は

中務卿宗并親王あな百首あな

権僧正実伴

養父の御ひりし風よ所の玉の如くあれは

建保五年四月庚申よ冬よりとつて

泰後雅経

われあつて来りてくく見れよとつて氣をみえ

冬より方れ中に 後三位為継

のよつて孝の字を云ふえくふと風よつて泰後

弘長元年百より方年一の時書

前大納言為氏

このゆつたの嵐乃風よ路をみえの時書事につく白書

名も方年けり所 前大僧正慈鎮

志が美乃浦や志しし時をれ書あつて書よぬりしあわの

建保五年内裏より合よ冬河風

泰後雅経

このは河めと書しつる里に衣けりよつて河を

百より方年一の時書せ給けり

順徳院御家

心河より方年一の時書あはれまじりつてつたの如く

前大僧正慈鎮

とつたよつてつたよつてつたよつてつたよつてつた

義久元年内裏より合し杜回書

正二位知家

秋のふとくぬくみえに本枝の枯れ梢の雪となりす

雪の初に雪の雪忠基りといつらうけり

九条右大夫

と氣の程雪よそへてまはらうとぬあふいとさひをれ

洞院坊政家百々奇ふ雪と

常盤井入道おと政長

今日ふもたふとふぬ白雪おとらふらん人かた

冬方れ中の 先後約旨

ふのつとふよつとふれとふいとねとや庭の白雪

西の法師とふめゆけり百々奇に

藤原門院少将

けけしたるあはれいふ心路とてつとふ雪とふふ雪

右京教雅約卜

わらみふりといふあはれいふ雪とふ雪とふ雪

た近中将公衡

ふ梅の心程れはる雪はるりして下を枝の雪はる

雪の雪とてふみゆけり

前大納言為家

やもつ聖し後芽う糸と証しぬ美重あらしはあめ白雲

道法法師

しりしとこ初ぬれら吹きて風よ阿まらるる景相書

守光は親王家の五十そそ奇の

宗道法師

山風若ら今しくぬふたり松とくろつ峯はたし書

又永十年七月内裏七首方をもし時

友原澄持朝臣

物也風の傳ふ絶終ていあらるるよはりの白雲

心あられ書のお志のひて水舟をさけりはほ

よみける

美茂氏久

神山の松も友とてけりた人ゆらとらふの由書み

弘長元年百そそ方をもける河原書

後二位朝臣

ち砂れねのり書に記あえてふりははあかん

菅原百そそ方をもける河原書

後二位朝臣

よふ果うらや後あんどられやまきと書に記あかん

建保五年内裏七首方をもる冬河原書

信実朝臣

思子乃おまは宿事て埋むれば枝の音とひらふを後

冬乃乃中六 平政村約長

仔細乃浦のひこふ落着れつりこめはとま

雪中遠情とふる

は性もなのおまを白と改官

かさくじふら白音ふ志をまは浦の煙と絶やわん

白河及七百そまうよ候名と書

坂磯城院河原

八十日ゆは漢のま砂砂とくもかさらもみえのり

都一らす

正親町院石系を

落着よく聲のたれあまそいつくふみんあめ

あいじんあつつりおまのこけくしてつる

物とゆり 周防内侍

あいのこしはあめいしして雲おふこはとせん

美治百そまうをまの河原

院少将内侍

九重とふらりやうとわんみさおら乃新書

正治百そまうよ 前中納言定家

海乃多子まうとまをいりやとてあめは月

中乃よゆらり河原れ新月あつらとけり

ふり也原の事なるひくは勝ちよる約  
けり次よみかりの師光の事あひてよ  
すうあそひて約きけり

前大細玄澄后

あそよ首人の御りたれ書し月よと友よるか

大細玄通方八幡文よる方合一均等

よ冬河月 後三位通氏

あそよそれをみよの御して書いよるよる月

後鳥羽院よ冬月五よる方合一均等

如新法師

徒よと年とよとあとのつり袖の事よ月よとよそ

弘長元年十二月内裏三首方よ河水

後花園院入道前太政大臣

年月よそよとゆねあす川ゆせあとのりよと

んて七年首方よとせ約けりよと

法平寛寛

冬北院日記わよとよとあとのつり袖の事よ月よとよそ

百よる方合一均等寛助法親王

つり袖の月日わりよとよとあとのつり袖の事よ月よとよそ

部一らす 祝部成仲

善

言のどけむらぬあまのつとめは  
年廿二のときより 望むるに  
幼年よりめづるに 幼くして  
基後

いけふと行へみわらぬ人の  
いけふと行へみわらぬ人の  
いけふと行へみわらぬ人の

續拾遺和歌集卷第七

雜言奇

弘長元年百三十三  
弘長元年百三十三

名笠内大臣

お取の美れ松のしるし  
お取の美れ松のしるし  
お取の美れ松のしるし

いそふとしむるも  
いそふとしむるも  
いそふとしむるも

妻の芳れ申は 雅成親王

池よおろみ糸はつ  
池よおろみ糸はつ  
池よおろみ糸はつ

芥尺納云紙



魯の邦をいさぐすにたつてふきまふたりと書そめく  
山里して常乃とそく唱け進かうみ侍者

武乳門院石系兼

尚ほ月ふそそけりるまをれは行常れ常そまらる

山階入道たは長家十そそりよ子目松とふ

源兼氏下

昔後や子目ふりて岩祢松雅ふひの進てまそと

口位の坂宗法院乃還昇いまこゆらえ

さりけるは百そそり部部してそまそ

次よ 皇太后又たそ後成

雲のうらあ運しは流とそそ又よ霧満てそまそ

たんとこころりて還昇おかせ

まけりらそそ

皇治百そそりめりける流よ山居

後醍醐院河

今又案つそそそおがらら山のまれゆりの

白河殿七首首方よおろしん

前大納言

山のれみえぬと老よこそそ案よそりふまの

建保三年内裏方合よ山居

の

後二位家澄

難波のや霧はまのこはしきまはるやみえは  
都一らす 平親清女

志不風の香を海にの淡松よ霧てふはまはる  
まのふれ中に 八條院高倉

忍くしはれはるあふんあふの勝月新よふ梅え  
世とまむらて卯よらりおゆよけいん乃  
りてはるらとら乃梅よそよのゆきを

若部之澄親

おそふいせりやんよ梅むあじらるるまるとこそよ

塵元く年ふはらまきのほよららふり  
てつらまらりてしらわらしゆり  
よとゆらり 前大納言為家

うそまのまらるま生しありのと我れまよふ  
ゆゆと 天台座主玄豪

得のの妹と契りてうまも老の命とつなま  
友原澄祐卿下

秋風よあひんふ命とも契てうまはる  
前開白一葉家よ百首うらよみゆらふ  
得幽 右近中おゆ家

物知りなれどもよめよめいふゆゑまじりよ

建保百三十九年正月

お中納言定家

花の色よ一ままけよゆゑにこころおれたのめ

神花の心よ 月花門院

嗚よけりまれば朝の極むゆまら極つる極せま

世のちのちの 土御門院小宰相

きりりあはれし人のあつとそたのむらむあね

右近中将師良

しよよまよとそ人を為すよ宿に花のあつハ

前大納言為家信吉結とそ方合しゆら

よ野一花と 友原仲敏

ゆららそま小整の極らむとやと秋宿とま

野一とす よし人ふか

吹とる風と花の白いとそ露よとつららら

河島とむとつららと

源時清

らおまは波と極よとらひおむの陰のほらら

まよあ帯刀あつとゆまらとそとひ出とま

友原基政

いづの妻れいふ様もあはれみせの陰をさふ  
あつむいふよとくもいひり

権少僧部 教雅

いふいふわういふあふよ花をいふいひり  
あふいふいふいふいふいふいふいふいふ

前大僧正 道玄

いふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
あふいふいふいふいふいふいふいふいふ

長部 澄親

思ふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
あふいふいふいふいふいふいふいふいふ

あつむいふいふ

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

衣笠 因大兄

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

信實 朝信

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

はる 平云朝

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

兵月 法師

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

あつむいふいふいふいふいふいふいふいふ

まね法師

まふそんふらと志すはるれよあもしゆいそま傑の神  
後系極坊政家の歌五十そ奇に

前大僧正慈法

くうりてこま物と月らもむと母ふいひとあま  
むしらす 土御門院水鏡

あそらもむとめてこねこの嵐よそくあう草  
花らりふ西園寺入道あを政大にりぞ  
より善法てゆけらむるゆふ

お中御言定家

ちかまふとこむあなりひゆたのむ様もあやさん  
むとんくくうみゆけり

道生法師

わぶのこむ人の命そ花とくこひけむあ  
雲林院あく新のありつとあ

中原新範

命とあうたあそく行むこひとくはとら様か  
あれとあ

平長時

あそとあらひやとれあの色ふらとあそく風そ  
あ

有尔系徳

ありて世はほくくとも様むらさひふそそきむせ

静仁法親王

むらぬ縁せまはむくく我身世まふあはれ

ふゆ花身はゆきらふくりのりりあはれ

のりりもてゆきらふのふ

深光行

易事てゆきみくくともけと雲のなげたふ白雲

返一 法眼宗田

ゆき道ぬきよそきりあはれゆきゆきゆき

ゆきゆき ゆき人あはれ

様花とやららんみくくのふき風よふきゆき

水色とゆき花とらんく

有原春總

若野河原の様花つりてそ園をそとぬ花の白浪

法平愚笑

らりゆきをそとらんゆきゆきゆきゆきゆき

平長季子

あはゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

美れ方の中に 前開白たふたふ

流川のあはれゆきゆきゆきゆきゆきゆき

有原宗泰

風吹梢のりり雲のちをわさよも秋の暮のよき雲

祝部忠成

橋をふらりふ雲のよみもそ秋の暮もあふ雲風吹

平義政

身ふらり雲のよみもそ秋の暮もあふ雲風吹

中務宗元親王

めりりあふ雲も首秋暮の月うらぬ神のあふ雲

實治百首のりり雲のよみもそ秋の暮

前内大臣基

りりあふ雲のりり雲のよみもそ秋の暮

百首のりり雲のよみもそ秋の暮

月

老らぬも今あふ雲のりり雲のよみもそ秋の暮

有原宗泰のりり雲のよみもそ秋の暮

定首は親王

有原宗泰のりり雲のよみもそ秋の暮

五社よ百首のりり雲のよみもそ秋の暮

有原宗泰のりり雲のよみもそ秋の暮

皇太后御文を奉後成

千の心音の松の梢のよき雲のりり雲のよみもそ秋の暮

そのうち年々としていささか小書付のり

前中細玄定之家

玄定は玄とみとるや有波の音より其相ありけり

おろしくおろしけり

お大細玄定之家

お大細のりぬねの有波は又玄定とみとる

三代の筆は其とてよりおろしけり

前大細玄定之家

其白のりぬねの世よりして音よりぬねありけり

は平下貫寛よりせりきり七千のりの中

八条院高倉

身よりて平下貫寛よりして年々此より思ひ

家は百よりありけりけり

後法住入道前貫寛之家

いささかいささかありけりけり

個院抄政家百よりありけり

後二位成實

律存正にやとるふりけりけり

部一らす 先後朝に

なりて今よりなりけりけり



さうらひありて三月乃言つて里より  
ふらみゆり 院并内侍

祢まら卯月の夜と契並て我らへいそく  
三月乃つりりし大貳之位とて  
たつらり 和泉式部

春柳の糸もみふら後よる雲乃ゆり  
返 大貳之位

春柳や雲となふらふ久々又春川の糸なりや  
都らす 小主人

ゆふき卯月ふらら祢の糸は本陰よみ  
述懐百そふ中 里を伝ふ事 俊成

祢よ川のこらふあひ糸河よあそもふ  
世とあふもよひら卯月の糸もて  
とゆふらゆつら平 春河の糸

こらて祢ねあひつ河をゆりむら宿ふ  
夏ふれ中に 後三位の娘

こらと恨もは河をゆりん雲も月ふ  
用白表もてまうりて故郷とて  
前用白たれたる

ゆふき卯月の糸もみふら後よる雲乃ゆり  
ゆふき卯月の糸もみふら後よる雲乃ゆり

部一々す

は平公親

り此のふし行ふ事の何ぞ成らばはしこころえ

百々方なす時 静仁は親王

とる人し月よらば母の何ぞこころいあせ老るはえ

寝え部么とふふと

前大納言為氏

部么なりきとそとておあり老のはえれ世海

曉部么

法入寺入道おを政大臣

り此のふし行ふ事の何ぞ成らばはしこころえ

夏ふれ中へ

お右若末為為教女

あやめなきふとそとていふもそつりいりやとわぬ袖の

鎌倉右大臣

いふと悲ふとあはれ思ふる夕れぬよふやふられ

土御門院中

り此のふし行ふ事の何ぞ成らばはしこころえ

秋魚橋とてと 天台座主と家

袖あはれ神のやわりのた老のはえそ昔とて

河五月也 友原家

後さぬわは波そとて吾睡川ふららふさく五月也の

中将とのそとて年久なりふとて

のびんののりつりけり

侍後雅有

いふせん我身よりゆく五月をまたのびみさしむる

郭云とよあり 源親行

五月をれ雲わらふの河をいふねとわつらん

法眼玄融

郭云みよとつちぢりよ身とく決まるとわつらん

家十首よりよとゆら河夏草と

山階入たる臣

弟ふれ夏草はたは海よいてと世のらりそとつらん

むーらす

法橋玄誓

去舟川の上とつちの夕やまに玉らる波をたるとあり

をよよ久しとこりわめて後勅終るり

物とよみ結びつ 久僧正道宣 一寶

立ゆりあつち急よとそこれの首急ととそ急これ

百首よりなり時 入道内大臣

山後とら麻のゆふとて浪をそ涼しなりぬるの河

六月後と 前大臣納言為家

みそと川初せとそとやと急言と若とす波のうら

涼しと

續拾遺和歌集卷第八

雜秋奇

初秋の心とて思ふ 前大菩薩僧教定

ゆふと秋の光のほえ乃枕より露をさ初て輝を伝

先後観心

けりあつ又つらまふあきとそりたるに秋のさあん

藤原季宗の心

神のよもやとわぬ白露乃草葉よ結ふ輝をさひり

初秋風とつとて 僧正聖徳

今より涼しくぬわくそ夏のよの葉を秋の心せ

意本面也成

色と心とわらひゆらうそせんひく後芽は秋のさあせ

文永十年七月七日内裏よそそりて時

前大細云為家

天河やそらふ心光の波又立うりきふよあひわ

醍醐入道おと政大臣女

こころす涙はくそと心けつ物と神の露は玉つさ

都一らす 静仁は親王

萩の葉は露の介らる涙は神よとてけて輝風を

弘長元年百首よりそそりて時秋と

前内大臣基

萩の葉は青から白<sup>れ</sup>落りしは老いしものやうなりん  
おと細云る家

いしおとらうりし運萩のよの吹く風とねえりて  
萩風整ふ夏とらうりて

高階宗成

秋のよれ露より卯の夜とらひもそぬ萩の上を  
弘長元年百とらうりて時露と

常盤井合前を改る  
らねとる葉の枕乃萩風は波よりらる整のよれ露

秋のよれ中に 前内細云基良

とひせく波乃露より時とらふ葉とらぬ萩の上を  
常盤井入道前を改る長家の十五とら

高階入るた人氏

いっなり秋は波のおらそめて身おしとと被おる  
中務で宗を親王家おれとら合よ秋り

た近中将具氏

身おらそととらととたのよいそとらりや袖おた  
むららす

後醍醐院御歌

そく露かるとらとらぬ夕乃萩乃月ひらるの雲深そ

前抄改たる

教まらうとて人の精のたまをそとにいとてとて神の意が  
後三位忠意

いそととてよ物のほろふ命のまはれはゆき  
平親清女妹

たふゆへうの意そとてふも神はつとて人の言  
有原宗徳

弟業のこゑけりてとて秋そとて我袖とてとてひび  
よとて人ふ知

りたれはまわく燈の意あつて風よとてはれは  
源親行

りたれは波やわらうらとて藤のつとて燈はわ袖そとて  
安あつ院宗

よとていとて雲のけりの玉業は我波とてとてとて  
前内大臣基

河風ふとわらうとてのけみえとてとてとてとて秋の玉業

建長三年九月十三日秋十首とて合ふ言  
同存 土河門院小宰相

とてとてや言とてとてとてとてとてとてとてとて  
有原澄持の言

とれをうらまの秋音かきても思つてすむるの思ふ

海老の音 中原新美

今又田子浦波打そとくもえぬ目とあき秋風音

三井寺にて月夕よみ侍りつふ

静助は親王

雲りそみくこの山に秋風よき波とくつる月け

回家月と云とと 友永時胡

宿じとふ休見の山田ののして神もあ月よ秋風吹

月前述懐と云とと

友永長宗

月がさよ月よあくらむ輝のこいあつたあつる海女

法平福助

せめてたぐ月を暮まると月けりあつる秋を海女

定寛は親王

月がさよ月よあくらむ輝のこいあつたあつる海女

弘長元年百三十九年正月と

前大納言の家

月のさよ月よあくらむ輝のこいあつたあつる海女

秋夕の中に お開白たはた糸

月あふと光の海乃てそとく首に秋のなとてま

建保二年秋十首方なき時

北野法師

物心無らうたり秋の風色月もさうあふ

野々々

前大納言為家

乃と秋の風色月もさうあふ

西野法師

何と秋の風色月もさうあふ

高弁上人

秋の風色月もさうあふ

法下云胡

月をさうあふ

建長三年九月十二日秋十首方なき時

月

北野法師

年々さうあふ

月乃方なき

北野法師

月をさうあふ

北野法師

秋の月と雲井乃さうあふ

秋の月と雲井乃さうあふ

二條院僧正



りるりふとて雲かきとてわが月我をそとにけり  
後人なりてはよみけり

藤原長経

雲かきの月かきぬとてそとにけり  
常盤井入道前大臣家にて月方よ  
みゆけり中二 かつく納をぬか

つよとてかきぬとてそとにけり  
洞院拾政家百三十九月

前中納言定家

首よきなりやけり朝なりありありけり  
首よきなりやけり朝なりありありけり

松門の暁月能個とてそとにけり

和氣権成親

雲かきの月かきぬとてそとにけり  
香の寺ありて月とてそとにけり

前岡白太右 一条

山あかりの月かきぬとてそとにけり  
むらたの月かきぬとてそとにけり

世よきなりやけり朝なりありありけり  
世よきなりやけり朝なりありありけり

法眼源義

そとにけり朝なりありありけり  
そとにけり朝なりありありけり

世と心とをば月とてよめる

道法法師

月影をふらふ秋の月とてよめる

中つゆの思出くみゆる

定修法師

月影をふらふ秋の月とてよめる

月影の中は 法下元宗

今又月影をふらふ秋の月とてよめる

信實朝臣

月影をふらふ秋の月とてよめる

前入僧正道玄

月影をふらふ秋の月とてよめる

名取百々をふらふ秋の月とてよめる

順徳院御製

月影をふらふ秋の月とてよめる

月影をふらふ秋の月とてよめる

月影をふらふ秋の月とてよめる

建保二年秋十月

源家長卿下

月影をふらふ秋の月とてよめる

百々文れ中に 前内大臣 基

あつあつ輝のほえろ身ふろく 老れつゝこと忘れ  
むしーらす しみんふ知

あふ新の福えろ身たろく こと忘れ けしき  
平忠時

任たりく 床の弟し 此董親より けしき  
は下ろお

蟋蟀鳴くと 我身のもろい こと忘れ けしき  
寛助は親王

ゆとりあまね 程と こと忘れ けしき  
百々文れ中に 前内大臣 良教

老うよのほえろ こと忘れ けしき  
少およ けしき

友原澄持朝臣

いよせろ こと忘れ けしき  
長月の例幣より 神祇官より けしき

ふ綿より こと忘れ けしき  
院并内約

夕阿る こと忘れ けしき  
お糸より けしき

法眼慶轉

わきそ又立しる袖をけりやとぞお葉のまは行阿あつ  
秋のふきかき

式乳門院水蓮

さひやふこころをまねめりり阿ん命を志しぬ秋のけい  
実治百そよりをまきり阿初冬阿あつとと

後三位為純

冬はく風とをみ神あいの三宮れいやん志しるん  
部一らす

友原実り名部下

このよは本葉阿あつ神あいの三宮のいよ冬をまきり  
帝直法師

よまのい風乃舞い言信て志しる物い本葉あはり

前中細云漬宣

ゆりころく本葉乃ほれり阿あつまふ方あつわく神  
土御門院水鏡

惟系志しるよまけい我神のいあきととそんえりりけ  
百そよりをまきり阿

お中細云漬平

いそらあまら老その松乃神云月阿あつとと身え  
冬方れ中い

静仁は親王

神を月よりそ神の阿あつととりり老の殿よ  
前大僧正澄弁

くたう神おすう人村町むいりあつとわら老のねえふ

意木田延季子

袖おと物いふけと核のやふらうたれさ物町むか

定意法師

浮身よふ波色袖よふ物と町むりりともりつをふ

法平公朝

世よふいふけふのふそく町むあくら我後れ

権少僧部因常

祚云月まらうをく物てしうらふふあふ身と物か

洗覚法師親王

わらふそふらうふやうけの尾上のねれとくれぬり

平義宗

嵐くそは浮雲あえくし町むそくはうくそはふ

入道二品親王さる聖心よこりらと物けつはつ

うらけつ 中務少宗尊親王

うらりあふの奥れ志らるるん都の雲らるるはりま

返一 入道二品親王性助

あつらふ都のそにといふそくさる聖心雲れ雲そくめ

古寺鐘とくふとく

心因法師

そら野山嘯と鈴ののどとこしく秋の萩よ都よりわん  
神玄月のはあつらさうとく霜はえん久れい室ふ  
此ころんよはけうけり

選子内親王

露萩と垂ふりそりそり子らんふらぬ宿の萩花よ

冬はあの中に 道生法師

たしとひのみらと結ふと河乃水そ枯れととらむ

権律師 仙兌

この池の菫もあふけさえてわんそらそらあ月

永治元年 後位のほこりとおゆけるふ新

葦舎の白皇后交れ四方よゆらうのまに

つうけり 皇太后交れ事 後成

めやしと日影とそそとあふや萩もは果つ萩花と

愛と 源義氏約片

あふら雲は通海風さえてし女のほこ玉そととら

あふらりけりかんこあ

上西門院 普勝

母中ふあしとこひささあれあなまうね言はさあ

あしらす ちんあか

里人の通ふつられたとあまこあふあわら萩の白言

典侍親子御札

あつ通ふら此書とて女あらんよひとていつら白書

平時後

約人のよめ日教やけり人絶えつる庭のしら書

前園白たれたる書目

初つきてしる道ぬ庭の書これ母よふりにける程とて

野権書とてふらとてよとて約き

た近中将所良

去日整ふふりしは成れぬあて書とてあつたてとて

書乃方とて お大細と良教

惟とみかたなり世にうふと書れ我独やいたりうと

建長二年吹田少く十首方なけり所

前大細と良教

立より又けりうとたて年ふりうと書とてゆき

松書とてふと

冬とての書のをけりうと書れねとてなとていふと

部とてらす とうと人ふ知

よとみかた老その枯よふと書れつりうと年はとていふと

とて乃書とていふと

後醍醐院氏より典侍

中...  
前大納言...  
後二位家澄

とまひ

後二位家澄

ふ...  
年...  
年...  
年...

年...  
年...

續拾遺和歌集卷第九

羈旅奇

後...  
後...  
後...

二條...  
二條...

し...  
し...  
し...  
し...

友原...  
友原...

と...  
と...  
と...  
と...

行...  
行...  
行...  
行...



あふまうらきんよつらうけ

津守経國

道とよとらゆえぬありとらぬとたのちを  
深光新あつまふゆりけりよけりうけ

如新法師

後衣さそとゆぬ物成よふあめあつたてのち  
都ふのやうてけあゆきりあ

友原宗徳

ろこえてきふ別乃みらあそと又なほあつたてのち  
不破の園屋よきこつきくゆけり

よんへーらす

都をさそとらりりみく雲えあつたてのち  
物まうりけりみらよそ

友原宗徳

ゆと急らそとらりりみく雲えあつたてのち  
道助は親王家の五十三のち

如新法師

三と急らそとらりりみく雲えあつたてのち  
後乃らと

前大徳玄質季子

ちと急らそとらりりみく雲えあつたてのち

羈中煉と云々と 前大納言為家

ふりゆく日敷忘るもそな葉は露をこもり枯風を吹  
あつまた方よゆきりけふふ心ひの弁ふ日  
敷にりりて秋も色ぬふれいふあり

津守四助

白河の雲をそゆるぬ東路も日敷へおまひ秋をせそや

親念法師

夕暮の空は雲をこ秋風は独やと云ふ思く河の流  
都一しらす 権中納言具房

立別を都へつらるる衣はふあつと云ふ秋の露をこさる

は平下寂信

露あふこころ衣なりと云ふ日敷と云はれ枯乃下る  
前大僧正道云

大納言重

草花より木の袖は露らりておも吹くも秋の枯風  
寛治元年十首より合は振宿嵐

皇太后宮女中後成女

露げさくらさりや庭草花嵐吹くも秋の振宿は  
らや乃中おとそよみ竹葉

中務之宗并親王

露のぬおけの神ひよふそ秋風きくまの中山  
むしらす 前入納言の家

海つとふ家月ふも都ふくろはやの中山  
友尔恭徳

らえふ心路のよきいそねもりきよたのむ枝あ  
平時村

露はふ聖尔の居れは枕責新の月の影よぬん  
後宿月と云と 控入納言の家

よむくの後ねの床がふれもむは月う袖よぬ  
あれ

修りしゆけりふ月と云と

前入僧正の家

月れいんぬそとふまぬい出とあき秋をぬも  
家五十首方よみゆけりふ聖後

入道二入親王の助

弟枕一秋の露と整りそ神よわろく聖の月け  
聖後の心と 後二位為继

はあふふ秋そとく後人そそひて出る高野  
清み乃橋と云とそよみゆき

中務之宗并親王

立由ふまの音の方にか系みえて月その  
都一らす 先の音も今も前持致る音

のねとて山路よふ月をいかりて出づ秋のよみ  
祝了成茂

初音は位は日より後多やうと云ふも音あり  
秋の言つては終りよ出づ音もふたし  
檀入細云成通りよつらうけり

西行法師

嵐吹果の本葉よ友あひくいつらうらうら  
寛治元年十首う合よ後省嵐

前右兵衛督為教

うら枕をいじとす所のやゆらうの音も  
物まうらきう道よく九月つこりとい  
ゆけり 氏部成範

草枕よこいりれ枯風よこりあもや露の音  
都一らす 正親町院右系平

おきてわよと山路よ末れ後多とらうと袖よ秋風を吹  
新田法師

何處の心なしく日よおきてわよと音あり  
十月つこりあの日物まうらきうふ何處

一はし

道信約片

志をこころしと申すなりそ神皇正統記の御事

羈中ノ夕と云ふこと

權律師一室為

後人の宿り名神正統記の御事

建保五年内裏方合よる夕ノ後

正三位知家

冬宵のゆかりの夕言の御事

夕踏神書と云ふこと

清輔約片

初言れ我と云ふこと

後希極極政未を政大兄

分々に本房のけ橋あること

家方合よ羈中一松風

光の字も入道前極極大兄

天原目と云ふこと

守覚は親王家五十五方よ後と

聖の字も入道

夕志の破す波と枕と云ふこと

後二位家澄

後二位家澄

仲津波よする破るるを枕をりるなりと名も  
貞治百その方をもる時ありん

八歳を散

よふゆみふのら枕の志を志ぬ波の  
むーらす 祝了成賢

とれらうさねの床の浪枕よりとる名をえり  
洞院持政家百その奇小孫

信實胡臣

なとまのひりし日言て更宿りす人り  
釋中一遠遠といふん

後三位光成

こえやうてきふらじつ是れ山陰をさるる  
むーらす 平長時

足柄のよれふりといひ言て一宿宿る竹下  
昔毒乃方よ海りけり所よけり

権律師一玄貫

初末といふもね長て名はるまゝお囃り  
室の八幡んふまうりきり人のさそひ  
よさうりしとありてやうけり

友原親和

きりあはせぬの八鶴とあひせぬあつとあつよ我をたえ  
素還法師一物あまうりゆきつふつり  
り  
権倉者大長

おまら浪八十鶴ひてあむ子あふひつらつたあえ  
返一  
素還法師

浪子あを鶴ひてあまも住ら海といつああ  
ひーろくさ終り一あつあそああ  
ありけつとみくよとゆけつ

貫仁は親王

かよほし首れ終の終をけしとみるああ末とたは

あかこみあくよみゆけつ

は平良寶

今と初昔の終とあつ今とあつあつあつあつ  
あつあつ

平河氏

うりあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
白河あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

権大納言経任

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ  
あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

新芝内大臣

孫人の名に雲をくくるといふこととてそのついでに  
孫養といふことなり

普光園入道前雲白大臣

立別部と云ふ事なくしてひとつらに後たみは  
とて河内後約多前大僧正澄弁

七十年ふまはしとて川老の波うらけそめ  
伴勢よゆりけりよ

小弁

ゆりもえてこそあえおらすとてゆりよ  
善信は

さき前よゆりきり人のうりて後とす

ゆりよふつうけり 安嘉門院甲斐

よそもむいよあまれ孫衣あし別とておのぼとせん

部いらす 大進大將朝光

いそつうとていそとて魚よ釣らんわんけいせん  
家よ百とてうらむゆけり小孫のいそ

洞院持政大臣

部人月日とてふとてとてとてとてとてとてとてとて

我とまらん



續拾遺和歌集卷第十

笑可

建治二年八月龜山殿よりてまゝりて去  
るに浮池といふ名を稱せしれりし也。

太上天皇

系代と龜乃松山の松陰といふしてよある宿禰の

務政前を政大臣

池水は松の子をせよとても君よとていひあはしむ  
るは二の鳥羽殿より池上松といふこと

冷泉を政大臣

初末といふにぬ松乃代といふにけし宗ありて池の

前大納言為家

池の松をえすとていふに代ありて松の子をせよといふ

同年正月松を去るといふに稱せしれりし

席をとりて 徳大寺入道ありて政大臣

子孫よりと松の縁を去るといふに去れぬを去る

正元二年二月西園寺より一切経借書し

りてありてついでに去る中宮ありて新替

ありてついでに去る中宮ありて新替

ついでに去る 前大納言為家

海のふちをまわつてゆくはきこもるもたゞの世に  
弘長三年二月飛山殿より舟をゆりて  
契進のひとふくとて海をくぐりて舟を  
山階入道たふは

とくしり舟をふりて山階をふりて久しき代に  
冷泉を改たは

飛のたれはつひあつ山階系代をいふは  
権大納言経任

ふふふと万代をいふは飛のたれはつひあつ  
建長六年三首より合はは



四之尺 万里山路右大臣将 千時

まじはし山路右大臣の御代に  
承安二年舟をゆりて池上をいふは  
富家入る前実白とて

文治百首より舟をゆりて池上をいふは  
実治百首より舟をゆりて池上をいふは

常盤舟入道おを改たは  
文治八年七月院忠で船を尾より舟をゆりて  
舟をゆりて舟をゆりて舟をゆりて舟をゆりて

とくしち代まつまのこゑさこゆるんゆり  
をのりよ 吾邦の澄親

昔より君のあまの宿され我しちをせとけり  
弘長三年九月十三日秋内裏十そふはし

時月前祝 前入納云為氏

君のよむ心出雲の月ふきいそいりくぬあはたのを  
家よ十首そふよみゆきか小秋月

山階入道たふは

雲のよふ影とあへて久曇月そふせ秋とよむ  
寛治八年冬月友とて既池上月とふ心と

権中納云俊忠

昔果あつ光とそく池あふふ世とよむ今秋のれ  
寛治元年十首そふ合よ海多月

後二位経朝

わがれくや昔ふくつ流の上に光あまのこ秋乃舟  
曰二年冬月友とそふ小月前祝

後二位経朝

君の世よ光とそくよ未をさこ中せの秋れあのみ月  
月と秋久とふ心と獲せしれゆり時

たふは

いねとくさうわ月の光うきみけのあやかし

又永五年八月十五秋内裏より合し回家

見月 前中御云資人宣

氏やとと田原の唐の秋風よいふれ雲の月とさう

後一位傳子七千笑よよみゆきう

宇治入道前開白を改官

君のあらしよとさうのて菊のむら末をくさふ

百さう中に 式子内親王

秋の末とさうはしし君代は露のつりさう菊下

菊は秋久とさうふと

六宰相帥為經

いさり老を姉とさあらん子代はしらの白菊を

正法百さうよ祝 前入僧正慈法

中せまてつりさう年たさうとさう書とさうあつ病を

部しらす 法成入道お務政を改官

華あいののさひめさあ世れおをせのねささうえ

書酒祝しつらと 常盤井入る前を改官

うふうも風おさうわ浪の上ふさふとさう雨代の秋末

又永之年二月續古今集竟章奇

後花園院入るおを改官

ふりくふみく玉りのわらまを山代群おつねは備後  
建保三年十一月わさふあしく秋阿よ  
九十賀賀初らせけりつ時よとゆき

前中細玄定家

若ふく子とせの救とゆつりよきそらおたり乃可代

お中細之範光

限ふらとくやの心はけきこしとせ乃故と程良也

大藏卿有家

老られさうゆくとをてす是しと度山の暮月け

建長五年七月三そと可よ

冷泉寺政大居士 河内大住  
たふね

新あひく光い身ふとあまららんのわらま故れ山の月

祝の心と 権大細玄長家

大原やそくりの松そきつ代ひつしうね海あぬき

建曆二年とよのみそれふとひをこふと

けつ次の目前中細玄定家りといつり

ゆき 参儀雅雅 干阿た中お

若まらて二あいとあつ河水よ子世そふとれあれ

今上の山元服乃時大細玄小なりありて

上妻はよあゆそといつりけゆき

長部之澄親

年あけておひともうす君代は又つふとたて  
建久九年の八輩舎主基方水屏風  
内中国神代を神祠とす

前中細云資実

神代乃浪の志しゆまゝに代りて  
仁治三年八輩舎主基方水屏風  
泰後為長

わさけき水代乃神代乃自山天照神の光りて  
嘉禎元年八輩舎主基方水屏風

河田三木村

前中細云家光

とれいり陰のしりまき村あとの露霜の世  
文應元年八輩舎主基方水屏風  
玉井 氏部之経光

涼さし子とせとてはふ玉井此あ  
松乃下け

Handwritten text in a cursive script, likely Chinese, appearing on the right page of the manuscript. The text is faint and difficult to decipher but appears to be organized into several lines.









